

沖縄文化協会 2023 年度東京公開研究発表会

日 時：2023 年 9 月 23 日（土・祝） 09:50-16:35

場 所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念ホール（神奈川県横浜市西区
みなとみらい4-5-3）

参加費：無料（非会員の方は資料代 500 円）

*会場へのアクセスについては 14 ページの「会場案内」もご覧ください。

全体スケジュール

09:50～09:55 開会の辞 仲原 穂（沖縄文化協会会長）

09:55～10:00 開催校挨拶

10:05～12:20 研究発表 午前の部

12:20～13:00 休憩（昼食）

*昼食は会場に隣接しているカフェ・レストランをご利用ください。

（会場内でのお食事はご遠慮ください）

13:00～14:40 研究発表 午後の部（前半）

14:40～14:50 休憩

14:50～16:30 研究発表 午後の部（後半）

16:30～16:35 閉会の辞 マルコ・ティネッロ（神奈川大学准教授）

【研究発表 午前の部】 司会 松永 明

10:05～10:35 泉水 英計（神奈川大学）

誰のため何のための医療援助か

—結核患者本土移送とハンセン病中学生の本土進学

10:40～11:10 古谷野 洋子（神奈川大学日本常民文化研究所）

八重山地方における〈低い島〉の稻作

一波照間島の水田立地と田の分布から—

11:15～11:45 久貝 典子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

久米島の染織調査

—2021～2022 年にかけて—

11:50～12:20 照屋 理（名桜大学）

『おもろさうし』にみる“兄弟姉妹”に関する表現について

【研究発表 午後の部（前半）】 司会 波照間 永子

13:00～13:30 三島 わかな（沖縄県立芸術大学）

「みんなのうた」にみる沖縄イメージ

13:35～14:05 大西 達貴（東京外国語大学大学院・博士前期課程）

比嘉康雄の初期作品群「生まれ島・沖縄」に表れる眼差しの逍遙

14:10～14:40 大嶺 可代（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所）

琉球芸能とテクノロジーの融合、その実現性について

【研究発表 午後の部（後半）】 司会 泉水 英計

14:50～15:20 世良 利和（沖縄映画研究会）

金城哲夫と灘千造

－幻の刑事ドラマ『沖縄物語』をめぐって－

15:25～15:55 名嘉山 リサ（和光大学）

USCAR製作「音楽」番組と間接的琉米親善

16:00～16:30 藤城 孝輔（岡山理科大学）

加害者側からの目線

—映画『レイ、初めての呼吸』における贖罪の主題と沖縄での反響—

【問い合わせ先】

沖縄文化協会東京支部 E-mail : jsos.tokyo@gmail.com

【10:05-10:35】

誰のため何のための医療援助か

－結核患者本土移送とハンセン病中学生の本土進学－

泉水 英計（神奈川大学）

米国施政権下の沖縄では療養施設が不足していたため、日本政府の援助により本土の療養所でも結核患者の治療がおこなわれた。1962年から施政権返還までの10年間に合計2730人が結核患者本土移送事業の対象となった。関係者の言動を辿ってみると、患者の命と健康を守るという本来の目的からは外れた意図が垣間見える。さらに、このようなズレは、ハンセン病中学生の本土進学事業と比較することにより鮮明になる。この事業は、琉球政府管内の生徒に瀬戸内海にあったハンセン氏病患者専用の高等学校を受験させるもので、やはり日本政府医療援助として結核患者本土移送と同時期に実施されていた。両者に通底していたのは、健康問題を抱えた当事者の援助という事業目的と並行し一ときにはそれに優先して一施政権者である米国との外交関係への配慮や、受け入れ先施設の定員充足という意図があったことである。

沖縄の結核医療への援助として、1950年代には日本結核予防会から派遣された専門医による肺外科手術がおこなわれ、本土の療養所での委託手術もおこなわれた。これらは琉球政府の事業であり、日本の影響を排除しようとするUSCARの介入によって理不尽な中断を迫られることがあった。1960年の日米安全保障条約の改定を前提に米国は日本政府援助の開始を認め、医療分野では無医地区への日本人医師派遣がその嚆矢となった。

結核患者本土移送の端緒は兵庫県の国立療養所の単独事業であったが、厚生省が介入し日本政府援助にいわば仕立て直して実施された。沖縄の窮状を伝え聞いた春霞園所長は50床を沖縄人患者用に確保し無料治療をおこなう計画を立てた。兵庫沖縄県人会の協力で、患者は周辺自治体に住民登録し生活保護を受給した。送り出しは、沖縄の患者団体である療友会が担当し、1961年4月に最初の11人が移送された。ところが、厚生省は無料治療も生活保護も認めなかった。USCARの意向が不明というのが反対の最大の理由であった。一方、春霞園所長には沖縄人患者を必要とする事情があった。1950年代後半の日本本土では結核療養所の需要は下降していた。行政管理庁監察では低い病床利用率を指摘され、国立療養所の所長たちは統合や利用転換への圧力を受けていた。個人の義侠心とは切り離して、施設長という立場からも沖縄人患者の移送計画をみる必要がある。

長島愛生園内にあった岡山県立邑久高等学校新良田教室に、1965年より愛樂園と南静園からの受験が認められたのも同様の事情が背景にあった。米国との交渉窓口となる南方連絡事務局は消極的であったが、校長の巧みな駆け引きにより態度をあらためさせられた。校長を動かしたのは深刻な募集定員割れであった。日本本土では治療技術の進歩と対策の進展により若年層の患者は激減していた。学校存続のためには、有病率が一桁高い沖縄にまだ残っている若い患者が必要だったのである。

【10:40-11:10】

八重山地方における〈低い島〉の稻作 －波照間島の水田立地と田の分布から－

古谷野 洋子（神奈川大学）

沖縄県八重山地方の島々は、山と川とを有する〈高い島〉と平坦な隆起サンゴ礁の〈低い島〉にわけられる。〈高い島〉は水があるので稻作が可能であり、〈低い島〉は水がないので稻作には向かないといわれている。石西礁湖（石垣島と西表島の間に広がるサンゴ礁の海域）の〈低い島〉では、〈高い島〉である西表島に通ってコメを作っていた。これを〈通耕作〉と呼ぶが、波照間島（最高標高約 60m）は石西礁湖の〈低い島〉でありながら、〈通耕作〉を行っていなかった。同島では稻作が行われていたからである。本発表は八重山地方における〈低い島〉の稻作について、波照間島の事例から述べる。

波照間島では天水田のため数年に一度しか満足に収穫が得られなかつたといわれる。宮良高弘『波照間島民俗誌』は、収穫の不安定な天水田を持ち続けていた理由として、「琉球王国の貢租がモミであったこと」、「地租改正後も天水田を保持してきたのは、島民の保守性・創造性の欠如、島嶼であるため外来文化の影響を受けることが少なかったこと」と述べている〔宮良 1972 39〕。拙稿「八重山における〈低い島〉の土地利用と畑の民俗名称—〈通耕作〉を行わなかつた波照間島の事例から一」では、「天水田の不安定性を考慮すると、同島の農業の基本はあくまでも畑作であったと考えられる」と述べた〔古谷野 2021 80〕。そして、人頭税制下では、実際には、コメとアワのどちらかを納めればよかつたのであり、同島ではコメのよく獲れなかつた時はアワを納めたのである〔古谷野 2021 72～74〕。だが、同島で稻作が続けられた理由については、同島の農業において、稻作がどのような役割をはたしてしていたかの検討が必要であろう。

『琉球石郷帳』（康熙七年（1668））の同島の田高は約 37 石であり、畠高の約 10 分の 1 ではあるがコメが作られていた。『沖縄県八重山島統計一覧略表』（明治 25 年（1892））では、同島のコメの収穫は 420 石であり、1668 年の 10 倍以上となっている。『竹富町勢要覧』（昭和 35 年（1960））によると、同島の畑と田の割合は約 2 対 1 になり、田面積は 1892 年より 16 町増えている。同島で天水田が消滅したのは 1963 年の波照間島製糖工場の設置後である。1668 年から約 300 年間、同島の稻作は発展し続けたことがわかる。

本稿では、島の人々への聞き取り調査と各種の地図を参照しながら、同島における水田立地と田の分布について報告する。そして、同島の農業は畑作と稻作のバランスの上に成り立っていて、稻作もまた重要な役割を担っていたことを述べる。

【11:15-11:45】

久米島の染織調査 —2021～2022年にかけて—

久貝 典子（沖縄県立芸術大学）

発表者は、政府による2020年3月の「緊急事態宣言」から2022年の秋頃まで、予定していた県外での調査が出来ない状態が続いていた時に、久米島の旧家（仮にA家とする）のご子孫より久米島の染織資料など数十点を調査させていただく機会を得た。今回はその概要を報告する。

調査報告をする前に久米島の染織物について簡単な説明をすると、当地は久米島紬の産地として周知されている。紬の技術の歴史は古く、15世紀半ば頃、中国から養蚕技術が伝わったとされる。一方、史料では越前国から琉球へ渡って養蚕・紬の技術を再伝した坂元宗味（「美済姓家譜」）、島津家の命を請け、久米島へ八丈島紬を伝えた友寄景友（「平姓家譜」）、久米島に植桑・養蚕・真綿の紡績方法を伝えた富村盛友（翁能哲。『球陽』尚益3年）ら17～18世紀頃から技術の伝播が確認される。久米島紬は、近世の琉球では王府より絵図帳（「御絵図」）指定の直接注文が行われる（御用布）など、厳しい貢布制度が布かれた。また近代の不況期や現代の戦争の時代など幾度かの存続の危機に直面したが、それらを乗り越え、2004年7月には国指定の「重要無形文化財」として「久米島紬保持団体」が認定を受け、現在に至っている。

調査を行ったA家は地方士族層で、近世琉球においては夫地頭職をつとめ（東：1982）¹、近代期には医者を出した、いわゆる地方の名家である。調査は先祖代々の遺品を久米島博物館へ寄贈する前に、所蔵品を見学させていただくという経緯で2021年9月に行われた。

A家の染織資料は、織物・衣装関係では裂地が39点、着物5点で計44点あり、その他は服飾品2点・小道具10点ほどであった。織物・衣装関係資料は旧家の遺品らしく、久米島紬（又は久米島産布）と思しき裂地が27点（織り出し付き2点）、琉球絣（南風原産か）・大島紬その他と思われる裂地が12点確認された。また、服飾品2点は帕であった。

本発表は、現在の所蔵者（A家及び久米島博物館）の許可を得て後の発表であるが、資料は既に博物館への寄贈が決まっていたこと、コロナ禍による諸制限の中急遽行われた調査であることなど、十分な調査が行えない状況であった。しかし現時点でこれら資料の概要をまとめておき、将来の研究の手掛かりとするために、本発表を行う。

注1. 東喜望「久米島の近世文書」（沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島　「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究』弘文堂、1982）P.199

本発表は文部科学省科学研究費基礎研究（C）「鎌倉ノートを一次資料とした染織語彙の作成及び琉球・沖縄染織の総合的研究」（JP18K00167 研究代表者：久貝典子）の助成を受けています。

【11:50-12:20】

『おもろさうし』にみる“兄弟姉妹”に関する表現について

照屋 理（名桜大学）

近世琉球期の文書からは、首里王府の論理を読み取ることが出来る。例えば、『中山世鑑』によれば、「阿麻美久」が「天帝」の命を受け、琉球列島をつくり、御嶽をたて、次いで天帝の子の男女が下って「三男二女」が誕生、その長男が「国之主」の始祖に、そして次男は「諸侯」、三男は「百姓」、長女は「君君」(きみぎみ)、次女は「祝祝」(のろのろ)の始祖に、それぞれなったとされている。

『中山世鑑』の記述の後半部分は、いわゆる「長幼の序」的な考え方がベースにあることがうかがえる。古琉球（中世琉球）期のパラダイムが描き込まれている『おもろさうし』では、このような論理はどのように表現されているのか、今回、試みに追究してみたい。

以下、今回の発表で取り上げるオモロの用例を一部掲げておく。例示に際しては、外間守善『おもろさうし』(岩波書店)、波照間永吉『琉球文学大系 1 おもろさうし (上下)』(ゆまに書房)を参考にした。

オモロ卷 21-16(1409)

おもとたけつかさこ節

本文	訳文
一 くめのきみばいや まゑにかち よてこう なさが めづらしや	久米の君南風は 前へ寄って来い 祖父の珍しさよ
又 おとゝきみばゑや まへにかち よてこう 又 こむて とて みらよ	妹君南風は 前へ寄って来い 組み手を取ってみようよ
まゑにかち よてこう 又 しまゑりぎや ほしやす やへましま おわちやれ	前へ寄って来い 島もらい欲しさに 八重山島へいらしたのだ
又 くにゑりぎや ほしやす きちやらたけ おわちやれ	国もらい欲しさに 於茂登嶽へいらしたのだ (以下略)

上記オモロは、久米島の君南風という神が石垣島にある於茂登岳へ、「しまゑり／くにゑり」(島もらい、国もらい)に来ている情景が描かれている。注目しておきたいのは、2節目(上記4行目)に見えている「おとゝきみばゑ」という歌詞である。「おとゝ」とは弟や妹のことであり、ここでは君南風はどのような立場にあるのか、考えてみたい。

オモロ巻 15-54(1105)

ちやうやおゑまのしが節

本文

一 きたたんに おわる	北谷にいらっしゃる
うらの世のぬしの	浦の世の主の
せざよ めづらがて	兄者を敬愛して
又 けおの 世かるひに	今日の良い日に
けおの きやかるひに	今日の輝かしい日に
又 大みきは つくて	大神酒を作つて
さかぐらは たてゝ	酒蔵を造営して
又 かつれんに おわる	勝連にいらっしゃる
おもひせざ つかい	敬愛する兄者をお迎えして
又 なおが ひきいちへ物	何を引き出物にしよう
なおが てつともの	何を手土産にしよう
又 いとおどしの よろい	糸緘しの鎧
まいとおどしの よろい	真糸緘しの鎧
又 おれど ひきいちへ物	これこそ引き出物だ
おれど てつと物	これこそ手土産だ

訳文

反復句（3行目）、および4節目（9行目）に「せざ」という語が見えている。「せざ」とは兄貴分のことである。特に4節目の「かつれんにおわる おもひせざ」は、ここに歌いこまれたオモロ世界の中で、どのような位置づけがなされうるのか。上出の君南風と同様、改めて捉えなおしてみたい。

【13:00-13:30】

「みんなのうた」にみる沖縄イメージ

三島 わかな（沖縄県立芸術大学）

NHK の番組「みんなのうた」は 1961 年 4 月にスタートして以来、今年で 62 年目を迎えた長寿番組である。現在七〇歳代以下の世代がこの番組を視聴して育ったと考えられ、本番組は現代日本のポピュラーソングを継続的に創出してきた場といえる。

それゆえに各種研究領域においても戦後日本の大衆文化を考えるうえで本番組への関心は高く、しかも本番組が「音と映像」で構成されることから、おもに音楽学や映像研究の領域で論じられてきたⁱ。なかでも発表者の立場となる音楽学の先行研究では、現代日本人のメンタリティ形成の変質や、文化的創造力が資本主義の論理に支えられてきた 1980 年代の傾向が指摘されⁱⁱ、さらには戦前日本の文化的産物である唱歌や童謡（いわゆる「子どもの歌」の系譜）が戦後どのように展開したのかを展望するにあたり、本番組内で放送された歌曲を対象に歌詞様式・楽曲様式を分析したうえで年代的変遷を提示しているⁱⁱⁱ。これら音楽学の知見の蓄積に立脚するならば、本番組内で放送された歌曲を通観することによって戦後日本の大衆歌の動向をひもとくことが可能だということ、さらには、現代日本人の心性を形づくるうえで本番組が少なからず影響力をもってきたことが証明されたことになる。したがって、これらの先行研究は日本の総体に視座をおいてきた。言い換えると、現代日本における大衆アイデンティティの形成について総体的に論じられてきたことになる。

上述した総体的アプローチの成果にもとづきながらも、総体のなかに「地域性（沖縄色）」がどのように組み込まれてきたのかを明らかにすることが本発表の目的である。方法としては、「みんなのうた」放送最初期の 1961 年 4 月以降、沖縄の日本復帰 1972 年 5 月を経て 2000 年代に至るまでの放送曲^{iv}のなかから、沖縄を表象（沖縄的な言語要素・旋律要素・楽器、映像効果、沖縄出身の歌手の起用など）する放送曲を対象とし、分析をはかる。結論として、本番組において「沖縄イメージ」をまとめた歌曲がどの時期に現出し、どのような社会背景のもと、どのようなメッセージを発信し、どのような響きを表現したかを解明しつつ、その年代的変遷をたどる。そこから、戦後日本の大衆音楽文化における沖縄イメージ形成とその意義について考察する。

ⁱ 先行研究は多数あるが、本発表の議論に深くかかわるもののみ紹介する。

葉口英子「“みんな”の『みんなのうた』～NHK 音楽番組の生産・消費をめぐる一考察」『マス・コミュニケーション研究』(62)2003：116-133。

佐藤慶治「NHK 音楽番組〈みんなのうた〉最初期についての考察～童謡・唱歌・民謡を中心」『総合文化学論集』(6)2017：39-54。

ⁱⁱ 葉口 2003。

ⁱⁱⁱ 佐藤 2017。

^{iv} NHK 放送博物館・番組公開ライブラリー内のアーカイブ映像（約 120 曲）を対象とする。

【13:35-14:05】

比嘉康雄の初期作品群「生まれ島・沖縄」に表れる眼差しの逍遙

大西 達貴（東京外国語大学大学院）

本発表は戦後沖縄を代表する写真家の一人である写真家・比嘉康雄（1938-2000）の初期作品群である「生まれ島・沖縄」（1972～92）を手がかりに、比嘉康雄が戦後沖縄の諸相を眼差す中で、如何にして写真家としての眼差しを確立していったのかという問い合わせについて、発表者の現時点での見解を提示するものである。

比嘉康雄は移民の子としてフィリピンに生まれ、現地でアジア太平洋戦争を経験した後沖縄に移住し、高校卒業後はコザで警察官となる。その際に写真係（鑑識）を任せられたことで写真表現と出会い、趣味としていくが、教員である交際相手が参加している反軍デモを取り締まる自らの職については疑問を抱いており、68年11月19日の戦略爆撃機B52の墜落炎上事故を受け、沖縄の現実を報道したいとの思いで警察の職を辞する。その後単身で上京し東京写真専門学院に入学し、72年には写真集『生れ島・沖縄』（1972）の出版を実現させ、卒業後は「復帰」により自らの属する国家となった日本を北海道から九州までを旅して撮影した写真と合わせて92年に『生れ島・沖縄 アメリカ世から日本世』（1992）を出版する。その後民俗学者の谷川健一の取材に同行し宮古島のウヤガンに触れ、代表作となる『神々の古層』（1989-93）にみられる琉球弧の祭祀世界を捉えることをライフワークとしていく。

比嘉は「生まれ島・沖縄」を作るなかで、当初は報道写真を志していたこともあり、「沖縄問題的な視点」〔比嘉 1976〕で写真を撮っていた。しかし、比嘉は沖縄の諸相にカメラを向ける中で眼差しの変化を自覚・経験し、個々の問題や出来事よりもそこにいる一人一人の人物に焦点を当てる眼差しとしての「私の視点」〔ibid〕を獲得する。比嘉が経験したこの変化の背景としては、「復帰」前後期の当時に沖縄で撮られる写真が沖縄問題と言う枠組みでイメージを切り取るセンセーショナリズムに基づくものであり、さらにそれが内地の記者という、問題の外から来たよそ者によって切り取られることへの違和感があり、政治やジャーナリズムが捉えきれない日常の中のイメージを取るべくして比嘉自身が沖縄に生きる一人として写真を撮る「私の視点」〔ibid〕が形成されることとなった。

しかし、二つの眼差しは断絶しておらず、「生れ島・沖縄」には日常の風景の中に沖縄問題的因素を写すこともあれば、政治的場面に生活感が現れている作品も含まれており、そこから読み取れるのは写真家と同じく沖縄に生きる人々の日常や生活の諸相を眼差し、提示する姿勢であった。

本発表は比嘉が「生れ島・沖縄」を作る中で如何にして写真家としての眼差しを獲得したかについて整理と提示を目指すと同時に、比嘉康雄という写真家を「復帰」前後期を捉えた写真家の一人として、沖縄写真史の中に位置づけていく試論としたい。

文献

比嘉康雄（1976）「[太陽賞]までの私の軌跡（上）」、『琉球新報』7月7日朝刊、第5面。

【14:10-14:40】

琉球芸能とテクノロジーの融合、その実現性について

大嶺 可代（沖縄県立芸術大学）

テクノロジーの進歩はまさに秒針分歩である。本年2月に会話生成型AIであるChatGPTのバージョン4が公表されて以降、各分野において人工知能を巡る動きが加速化している。ニュースやSNS上では本物かどうか見紛う写真が連日公表ならびにシェアされ、国際情勢に混乱をもたらす事態も報じられるようになった。

さて、演劇とは表現方法により無数のバリエーションがみられるが、大まかに規定すると「シナリオ（脚本）や戯曲といったある一定の文学的型式に音楽的因素や美術的因素を加味しつつ、ストーリー性に基づき人間の喜怒哀楽に代表される感情や、人間関係に代表される社会構造を舞台上にあらわす総合芸術」である。技術革新がもたらす人間界の変化の動きに沖縄の芸能関係者も無関係ではいられないだろう。

例えば今年5月末には、音声ファイルをAIに変換させてアニメーションに出力し、それを簡単に編集することによって字幕付き映像を作成できるようになった。ウチナーグチであっても多少のチューニングを加えれば字幕付きアニメーション動画の制作が理論上は可能である。今後技術が向上すれば、滑らかなウチナーグチをAIが体得してしゃべる、そんな世の中がやってくるかもしれない。この秋、発表から一週間後には新型のMeta Quest 3の発売が予定され、ユーザーは今まで以上にリアリティ溢れる「没入型ゲーム」などを楽しめるだろうと現段階から多くの期待が寄せられている。

先進的なテクノロジーはどう取りこむか、沖縄側から世界へどういった情報発信が可能か。神奈川大学の卒業生でもあるシステムエンジニアの鈴木氏とともにいくつかの事例の提示を行いたい。

なお、こういった生成技術にはどうしても著作権が絡み、問題となるケースも確認されている。誰もが沖縄を表現し適切な情報発信をしていくにはどうすればよいかについても考えていきたい。
提示例：

- ・AIが生成する沖縄方言のアニメーション動画
- ・沖縄の風景画像などを読み込み、AIに画像を生成させ活用を試みる
- ・メタバース首里城の様子とアバターの動き。首里城は言うまでもなく組踊の舞台があったところだが、それをメタバース上で再現は可能か。どのように琉球芸能を繰り広げられるか。

将来実現可能なビジョン：

- ・組踊や沖縄芝居などで聴覚障がい者への情報保障の手段として手話生成、タブレット端末などの配信
- ・AI生成画像の活用しウチナーグチ音声を合成した即時映像配信
- ・Meta Quest機器などを活用した遠隔の琉球芸能技術指導。目測や感覚ではない、数値化による総合的な指導と後継者の育成など

【14:50-15:20】

金城哲夫と灘千造

－幻の刑事ドラマ『沖縄物語』をめぐって－

世良 利和（沖縄映画研究会）

特撮テレビドラマ「ウルトラ Q」や「ウルトラマン」の企画・脚本で知られる金城哲夫は、玉川大学を卒業してから円谷プロでの活動を本格化させるまでの間に、沖縄で二つの映像作品を手がけている。一つは沖縄芝居をベースにした全編うちなー口の映画『吉屋チルー物語』(1963)、もう一つは全国ネットでの放映を意識したやまと口の刑事ドラマシリーズ『沖縄物語』(1963)だ。前者は不完全ながら映像が現存し、しばしば上映や紹介も行われてきた。これに対して後者は制作が予定された全13話のうち、3話分がパイロット版として撮影されたものの本格的な制作には至らず、しかも映像の行方がわからなくなっている。

このシリーズは映画『たそがれ酒場』(1955)などの脚本で知られる灘千造が構想を抱えて沖縄に渡り、映画興行関係者やテレビ・新聞社の幹部、各分野の有力者等に協力を依頼しながら取材とロケハンを行ったものの、結局スポンサーが見つからないまま金城哲夫との共同製作という形で撮影を開始した作品だ。本土のテレビでは1961年から『七人の刑事』や『特別機動捜査隊』といった刑事ドラマの放映が始まり、人気を集めていた。かねてより沖縄に関心を持っていた灘は、こうした刑事ドラマブームを意識しつつ沖縄に題材と資金を求め、作品を東京のキー局に売り込もうとしたのだ。

これまでに論者は撮影された3話分のスタッフ用台本を入手してそのあらすじを紹介するとともに、沖縄芝居の高安六郎、ジャーナリストの森口豁、脚本家の上原正三、日活俳優の中村万寿子など、撮影に関わったスタッフやキャスト十数名にインタビューを行い、フィルムの行方や撮影現場の様子について調査を行ってきた。ただしその情報のほとんどが沖縄で収集され、出所も金城哲夫に近いものが多く、灘千造側からの情報は皆無に等しかった。一方、晩年の灘と親交のあった映画監督の森崎東や脚本家の掛札昌裕からは、灘が映画界から姿を消したのは『沖縄物語』の負債が原因だ、との指摘を受けた。その真相を明らかにするため、論者は灘の遺族と連絡を取って直接話を聞き、幸運にも灘の遺稿や関連資料の寄託を受けることができた。

そこには灘による『沖縄物語』の一話分の直筆原稿や下書き原稿、大学ノートに記された「沖縄日記」などが含まれていた。また沖縄芝居の俳優情報を写真付きでまとめたファイルも残されており、本シリーズに取り組んだ灘の姿勢の一端がうかがえる。さらには灘と金城が交わしたと思われる契約書の下書きや、当時の大蔵大臣「田中角栄」宛の役務契約申請書も見つかった。本発表では新たに発掘できた以上のような資料を元に、金城哲夫と灘千造の出会いを含む『沖縄物語』撮影前後の経緯を明らかにしたい。

【15:25-15:55】

USCAR 製作「音楽」番組と間接的琉米親善

名嘉山 リサ（和光大学）

戦後沖縄を統治した琉球列島米国民政府（USCAR）は、広報活動の一環として、1960 年ごろからテレビ番組を制作・放映した。残念ながら、それらの番組すべてが現存しているわけではなく、全体像を表すような公式な放送記録もないが、米国立公文書館には米国民政府が制作したフィルムの一部が所蔵されており、そのリストは沖縄県公文書館でも閲覧することができる。特に規則性のない 1 から 2231 番までの通し番号を見てみると、米国民政府が行った公共事業や公社関連、経済・産業関連、医療・公衆衛生関連、高等弁務官など高官の各地視察、福祉・社会活動関連など「硬派な」内容の番組が数多く制作された中で、文化に焦点を当てた番組も少なからず存在していることがわかる。

1950 年の米琉親善記念日制定以来、琉米親善と呼ばれた住民緩和政策が各地の琉米文化会館ではもとより、様々な機会をとらえて行われた。米軍と市町村代表からなる琉米親善委員会が各地に設けられ、1960 年代になると全琉を 28 の地域に分け、12 地域が陸軍、9 地域が海兵隊と海軍、7 地域が空軍の親善活動対象地に指定された（『沖縄大百科辞典』）。宮城悦二郎は、「このような活動は一方的な宣撫・説得活動でしかなく、眞の相互理解や友好関係を生み出したとはいがたい」との見解を示している（『沖縄大百科辞典』）。そして、その活動は広報局によって撮影され、イベントに参加しなった人々にも電波を通じて宣伝された。

上記のリストの中の番組名あるいはフィルムタイトルに「琉米親善」と名の付くものは 11 ほどあり、それ以外でも文化会館でのイベント、クリスマスパーティー、琉球文化の紹介、若者の活動などを追ったタイトルが多数存在するが、その中でも、陸軍バンド演奏や学校行進バンド関連のタイトルが目立つ。本発表では、番組を通して伝えられた文化活動を「間接的琉米親善」と位置づけ、西洋音楽を扱った『特別番組—親善の架け橋（第 29 陸軍バンド）』（1970 年 5 月 15 日放映）、『テレビウィークリー—第 7 回学校行進バンドコンテスト』（1970 年 11 月 30 日放映）、『人・時・場所—第 8 回学校行進バンドコンテストについて』（1971 年 9 月 7 日放映）を中心に検討する。1964 年から陸軍琉米親善委員会では、中学校と高等学校を対象に行進バンドコンテストを開催していた。『親善の架け橋』という番組では、指揮者が沖縄の学校バンド、行進音楽の指導、沖縄の音楽文化の向上に寄与したことで感謝状が贈呈されているが、このような「表彰式」は頻繁に行われていたようである。米軍樂隊由來の行進バンドを沖縄の若者が行う様子、軍樂隊の演奏やそれを聴く沖縄の人々が映されたこれらの番組から、音楽を介して間接的に他者に触れるここと、映像メディアをとおして間接的に琉米親善を伝えることの意味を探る。

【16:00-16:30】

加害者側からの目線

－映画『レイ、初めての呼吸』における贖罪の主題と沖縄での反響－

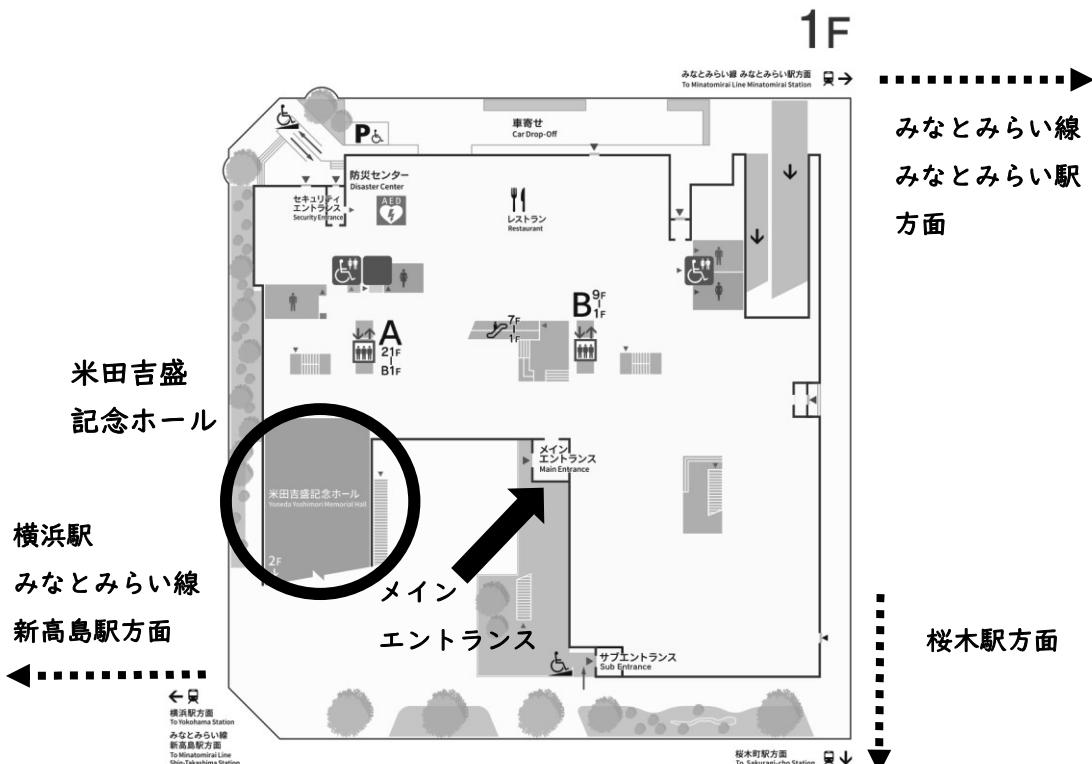
藤城 孝輔（岡山理科大学）

アメリカで制作された2008年の映画『レイ、初めての呼吸』(The First Breath of Tengan Rei, 梶野純子／エド・M・コジアスキー監督)は、架空の暴行事件として描かれているものの、1995年9月に発生した米兵による女子小学生暴行事件に着想を得ていることがこれまでにも指摘されてきた。「アメリカ兵に暴行を受けた少女レイの10年後を描いた長編ドラマ」(日本語版プレスキットより)であり、復讐を誓った主人公のレイがアメリカでかつての加害者の一人の息子を誘拐するという物語である。父親の過去をレイから聞いた息子は一度は彼女のもとを逃げ出すものの、レイと一緒に親元からの家出を企てる。作中には、1995年の事件が当時の沖縄社会にもたらした大きな反響を彷彿とさせるシーンが挿入されるほか、単に基地問題をめぐるアメリカと沖縄の関係だけでなく復帰後の日本と沖縄の関係にも目配りを利かせた表現も見受けられる。事件の加害者側に焦点を当てた作品には加害者の一人にインタビューを行ったドキュメンタリー映画『沖縄うりづんの雨』(ジャン・ユンカーマン監督、2015年)などがあるが、本作では加害者側の目線で見た暴行事件や、逮捕および釈放後の加害者側の葛藤がフィクションを通して想像されている。

本発表では作中に繰り返し描かれる贖罪の主題に着目し、本作の現実の事件との距離の取り方について検討する。映画では加害者のクリスチャンとしての信仰の目ざめに焦点があてられているほか、息子が黒人靈歌を歌うシーンなどにおいてキリスト教への言及が見られ、新しい生への生まれ変わりを象徴する儀式である洗礼の比喩や無垢なる者の犠牲を強く連想させる視覚的イメージを通してキリスト教的な意味での贖罪の主題が象徴的に提示されている。しかし、作品内でこの主題の意味が明示的に説明されることではなく、これらの視覚的イメージがどの登場人物の何の罪の贖いを示唆するのかは最後まで曖昧なままにされている。本発表では、現実の事件をベースにした物語であることを踏まえたうえで、加害者側の視点で描かれる贖罪の主題が沖縄の社会的文脈のなかでどのような意味を持ち、本作がどのように受け入れられるのかを考えてみたい。2008年6月に『レイ、最初の呼吸』という日本語タイトルで行われた沖縄県内での上映会で交わされた制作者と観客のあいだの討議は、少ながらぬ数の人間がいまだに1995年の暴行事件を憤りとともに記憶している沖縄で本作がどのように見られたかを知る手がかりとなるはずである。

◆会場案内

研究発表会場：神奈川大学みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念ホール
神奈川県横浜市西区みなとみらい 4-5-3



◆入会案内

- △ 沖縄文化協会は、沖縄の文化を研究紹介し、その進展に寄与することを目的とし、広く沖縄研究者および沖縄に関心を持つ人々を会員として運営されている会です。
- △ 本会は、上の目的にそって、研究発表会、公開講演会、機関誌『沖縄文化』の刊行、沖縄文化資料の蒐集、複製、刊行などの事業を行っております。
- △ 所定の会費を納めれば、どなたでも会員になれます。年間会費 5,000 円（誌代 2 冊分を含みます）。
- △ 会費は振替もしくは現金為替で、下記の所へお送りください。

〒903-0815

沖縄県那覇市首里金城町 3 - 6

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所

鈴木耕太研究室気付

『沖縄文化』編集所

電 話 098 (887) 2652

振替口座 02030-5-25170

U R L <http://okinawabunka.c.ooco.jp/>

【メモ欄】